

## 〔資 料〕

# JUFA Referee Seminar の実際

## ——インストラクターと審判員の経験に着目して——

赤 阪 修

### はじめに

2022年3月8日から13日まで福島県相馬市J-VILLAGEにおいて第36回デンソーカップチャレンジサッカー福島大会（以下、デンチャレと省略する）協力の下でJUFA Referee Seminar（以下、JRSと省略する）が開催された。デンチャレは各地域大学サッカーリーグ開幕前のいわゆるプレシーズンに1987年以来、35年にわたって開催されている。第1回大会から第10回大会までは全日本大学サッカー地域対抗戦、第11回大会からはデンソーカップチャレンジサッカー大会と称している。しかし2020年の第34回大会と翌2021年の第35回大会は新型コロナウイルス感染症拡大のため開催中止となっていた。第36回デンチャレは実に2年ぶりに開催されたのである。

第36回デンチャレはU-20全日本大学選抜、関東大学選抜A、関東大学選抜B、関西大学選抜、九州大学選抜、プレーオフ優勝チーム（東海大学選抜）、プレーオフ選抜、日本高校選抜の合計8チームが出場、熱戦の末、関東選抜Bが優勝して幕を閉じた。他方、JRSは、全国の学生審判員を育成することを目標に、全国8地域の大学サッカー連盟より推薦された16名が参加<sup>1)</sup>、昼の部では試合及びその振り返りを通じた実践形式の研修が、夜の部ではインストラクターによるセッションを通じた座学形式の研修が行われ、第36回デンチャレの運営の一端を担った。そしてその一端には、従来ほとんど明らかにされていない大学生カテゴリーの審判育成について熟慮するインストラクターと、将来国内外で審判員として活躍を夢見る大学生審判員の多様な経験が存在していた。幸運にも今回筆者はインストラクターとしてJRSの準備と運営にたずさわる機会を得た。そこで本報告では、インストラクターと審判員によるJRSでの経験について、筆者の経験のみならずインストラクター1名と審判員2名が提出した参加報告書も手掛かりにしつつ報告していく。

## I JRSに向けた準備

### 1. インストラクターの狙い

2021年12月、全日本大学サッカー連盟から筆者に第36回デンチャレに関する連絡があった。内容は、全国8地域の大学サッカー連盟から第36回デンチャレを担当する審判員を選出して欲しいというものであった。冒頭で述べたように、2020年の第34回大会と2021年の第35回大会は新型コロナウイルス感染症拡大を理由にデンチャレ自体が中止となっていた。2022年の第36回大会は2年ぶりに開催されることとなったのだが、実のところ筆者は審判員の派遣を直ぐに受諾したわけではなかった。というのも筆者の脳裏には、4ヶ月前の8月中旬に開催された全国高校総合体育大会で審判員3名がコロナウイルス感染者に、審判員及びその指導者12名が濃厚接触者になってしまった一件が浮かんだのである<sup>2)</sup>。しかし間も無く筆者は依頼を受諾した。筆者は公益社団法人日本プロサッカーリーグの業務に従事してい

ることもあり、大学生活を懸けて全日本大学サッカー連盟の事業を運営し、第36回デンチャレを開催するために議論を重ねていた学生スタッフの想いに心が突き動かされた。もちろんその決断は正解が無い新型コロナウイルス感染症防止対策について試行錯誤を繰り返しながらコロナ禍の「JリーグYBCルヴァンカップ決勝」をはじめとするメガスポーツイベントを成功させてきた筆者の確かな経験に支えられていた。筆者は考えた。JRS参加審判員にはコロナ禍で奮闘する学生スタッフの姿を目で見て、彼らの想いを背負って試合を担当して欲しいと。

今回の研修会にインストラクターとして参加した主たるメンバーは、1級審判員として明治安田生命Jリーグディビジョン1（以下J1と省略する）を担当し、関東大学サッカー連盟審判エリートコース（以下、ERCと省略する）の講師を務めている筆者、2級審判員インストラクターとして東海社会人及び大学サッカーリーグ1部を担当し、東海大学サッカー連盟審判育成コースの講師を務めている青山健太氏であった。筆者にとって青山氏は審判活動の先輩にあたり、その関係は約15年に及ぶ。筆者と青山氏は何度も試合を共に担当してきたので互いの大学生カテゴリーの審判育成に対するビジョンを共有しているし、青山氏引退後の現在もそれに関する連絡を密に取り合っている。それ故、JRSのセッションについては筆者が日本のトップリーグ担当審判員に求められていることを現役J1担当審判員の立場から、青山氏が地域リーグ担当審判員に求められていることを現役東海地域担当インストラクターの立場から検討することとした。

#### 1) 国内トップリーグ担当審判員に求められていること

サッカー競技規則では1級から4級までの各級毎に目標と重点項目が設けられている。全国大会レベルの試合を担当する1級・女子1級審判員には「適切な技術とプレーヤーズ・マン・マネジメントによるゲームコントロールを追及すること」が求められている。プロリーグを担当する1級審判員には「チームや選手の特徴を理解して、レフェリーチームとして説得力あるゲームコントロールを追及する」<sup>3)</sup>ことが求められている。

今日、Jリーグは、「激しくて、フェアで、エキサイティングなゲーム」<sup>4)</sup>を志向している。そうした動向を受けて、Jリーグ担当審判員を統轄する東城穰は、試合中に生じる些細な接触と見誤れば危険な事態へと発展しかねない反則の「境目」を判断していくことがレフェリーには求められていく<sup>5)</sup>と見通している。その上で、JFA審判委員会で審判指導者を統轄する石山昇は、国際試合に起用される審判員はフィールドでの正確な判定や走力などのパフォーマンスに加えて、英語でのコミュニケーション能力や自らが下した判断を明確に示すことができる情報発信力が「以前より強く求められるようになった」と指摘している<sup>6)</sup>。石山の指摘は、国際審判員のみならず、外国籍の競技者が数多く在籍している日本のトップリーグ担当審判員にも該当する<sup>7)</sup>。

Jリーグ及び日本サッカー協会審判委員会の方針は筆者を含むJリーグ担当審判員にも当然共有されている。そのため筆者は将来性のある審判員が集結するJRSを開催するにあたり、自分の意見を持ちつつそれを適切に相手に伝える、ということをセッションに組み込むべきと考えた。筆者は「各地域大学サッカー連盟での審判活動紹介」と「チームビルディング」と「国際審判員との交流」を提案したのであった。

#### 2) 地域リーグ担当審判員に求められていること

2級審判員には「試合の流れを大切にしながら、一貫した的確な判定基準によるゲームコントロールを追及すること」が求められている。2級審判員が担当する試合の範囲はユースから地域の大学及び社会人まで幅広い<sup>8)</sup>。青山氏は「様々なカテゴリーの試合でその流れを汲み取りながらゲームコントロールをするのは経験豊富な2級審判員でも難しい」と言う。10年以上にわたり大学生カテゴリーの審判員

Oct. 2022

JUFA Referee Seminar の実際

育成に携わっている青山氏によれば、特に学生審判員は経験豊かな選手から不満をぶつけられると動揺し、判定基準が崩れてしまうことがある。そのような経験をした審判員は反則を探しにいく傾向があり、競技者がJリーグの志向する「フェア」かつ「激しい」プレーをしようとしても笛で止めてしまうことがある。

筆者も確認したが、今回JRSに参加した審判員の多くが的確な判定基準の獲得を課題としていた。理由は、大よそサッカー競技の理解が乏しく、競技者間の接触が「ノーマルフットボールコンタクト」なのか否かが判断できていないためであった。大学生カテゴリーの審判育成に尽力してきた青山氏は、地域リーグ担当審判員、特に大学生カテゴリーの審判員には適切な判定基準の獲得が求められていると主張した。それ故、青山氏は「競技規則テスト」と「試合の振り返り」を提案したのであった。

### 3) セッション内容の決定

上述したように筆者は「各地域大学サッカー連盟での審判活動紹介」と「チームビルディング」と「国際審判員との交流」を、青山氏は「競技規則テスト」と「試合の振り返り」を実施すべきセッションとして提案した。以下、具体的な内容について述べていきたい。

#### (1) チームビルディング：審判チームとしての結束強化

試合は審判員4名で協力してゲームをコントロールしなければならない。また大会の成功のためには、判定基準を統一するなど、参加する全審判員が同じ意識で試合に向かうことが極めて重要である。そこで初日の研修会では、お互いに面識がない審判員の信頼関係を築くために、チームビルディングを計画した。

第一は、審判員の名前や特徴を把握したり、相互の信頼関係を構築したりするために「積み木式自己紹介」を計画した。その後のセッションでコミュニケーションを図るその糸口とすることが狙いであった。

第二は、「人生」において「審判」をどのように位置付けるのかを2グループに分かれて話し合い、それぞれ発表することを計画した。第一の作業を踏まえてコミュニケーションを図りながら課題に取り組むことでグループ内のみならずグループ間の結束力をも強化することが狙いであった。

#### (2) 競技規則テスト：求められるより高いパフォーマンスを発揮し得る審判員

大会の協力のもとで審判研修会を開催する際は通例初日に競技規則テストを行う。初日に競技規則テストを行うのは、内容の再確認という目的以上に、審判員のそれに対する理解度をインストラクター側が見極め、翌日以降の割当決定に際する参考資料とするためである。インストラクターは、JRS参加審判員が如何に高いパフォーマンスを発揮するために準備してきたかを初日の競技規則テストで図るのである。

今回は、「サッカー競技規則の基本的な考え方と精神」、第1条「競技のフィールド」、第2条「ボール」、第5条「主審」、第12条「ファウルと不正行為」から出題した。特に主審の対応を答える問題では、ペナルティーキックや懲戒罰、再開方法など、各地域でミスが多く起こっている事象を取り上げた。

#### (3) 試合の振り返り：適切な判定基準の獲得

まず、筆者らは審判員が試合で下した判定を分析、JRSの目標の一つであった適切な判定基準の獲得に向けて課題を抽出した。次に、筆者らは分析を通じて抽出したいくつかの項目についてディスカッションを行う機会を設けた。ひとつは審判員のみでディスカッションを行うもので、もうひとつはそれにインストラクターも加わるものであった。重要なのは前者である。筆者をはじめとするインストラク

ターがはじめに見解を提示するとそれが正解のように審判員に受け取られ、その他の見解が提示されない可能性が予想されたためである。筆者らインストラクターは、審判員が事象をめぐって判定した結果はそのポジショニングによって多様であると考えている。それ故、筆者らインストラクターは一つの正解を求めるのではなく、多くの人々が共感し得る適切な判定を追求しようとしている。筆者らは判定をめぐるとそのような考え方に基づいて、現場において担当審判員がディスカッションする対象としての事象をどのように認識し、判断し、判定したのかについて本人が共有した後、他の審判員を含めて多様な視点でディスカッションを行うこととした。

#### (4) 地域の活動紹介プレゼンテーション：伝えるトレーニングと審判活動に関する情報共有

筆者らインストラクターは大学生カテゴリーの審判員育成について長期的な見通しを持って取り組んでいる。とはいっても、JRSのような研修会を頻繁に開催することはできないので筆者らは研修会を起点ないし媒介としてその終了後も各地域で育成が進んでいくシステムの構築を目指している。その実現を図るためには他地域の同世代の審判員のふだんの審判活動についての情報を入手し、その情報を参考にしつつその後の活動に反映していく必要がある。しかし各地域の活動紹介プレゼンテーションでは日頃取り組んでいる審判活動の紹介のみに焦点を当てたわけではない。同プレゼンテーションでは発表内容のみならず発表者の所作にも注意を向けるよう指示した。筆者らインストラクターは、大学生カテゴリーの審判員育成に対し有している自分の意見を適切に相手に伝える、という課題を乗り越えるトレーニングになるし、各地域の審判活動状況が共有されることにもなると考えたのである。

#### (5) 国際審判員、JFA インストラクターとの交流会：審判活動とキャリア設計

JRSの計画段階で筆者らインストラクターは、日本サッカー協会からの新たに1級審判員に昇格した女子国際審判員の杉野杏紗氏を第36回デンチャレ担当審判員として参加させて欲しいとの打診を受諾した。杉野氏の試合を担当するインストラクターとして元国際審判員の上川徹氏も帯同することとなった。

筆者らインストラクターはJRS参加審判員が憧れる舞台に立った経験を有する2名の話を聞くことは学生審判員の学びに繋がると考えて2名とJRS審判員の交流会を設定した。

## 2. 審判員のJRSに向けた準備：フィジカル・タクティカル・メンタルの調整

2名の審判員は、JRSに向けてフィジカル・タクティカル・メンタル面での調整を行っていた。以下ではその具体的な内容について記述していく。

### 1) A氏の準備

A氏はまずフィジカル面で3つの準備を行った。1つ目にトレーニング及びトレーニングマッチ（以下TRM）で大学生のスピードと体力に負けないよう体づくりを行った。前シーズンが1月中旬で終了していたので、2022年3月に開催される第36回デンチャレは実に約2ヶ月ぶりの公式戦となる。試合感覚とフィジカルの維持及び向上を目的に自身が所属する大学サッカー連盟を経由して大学生や社会人のTRMを計7試合担当した。

トレーニングは、TRMが立て続けに予定されたためにリカバリートレーニングやコーディネーショントレーニング（ステップワーク、体幹トレーニング）、アジリティートレーニングが主であった。しかし問題が発生した。低気温の中、連日TRMを担当し続けたために脚に違和感があらわれたのである。審判員にとって身体の違和感が少しでもあることは不安である。試合中に身体の違和感があらわれれば審



Oct. 2022

JUFA Referee Seminar の実際

判員は眼前に繰り広げられている事象どころではなく残りの試合時間にばかり気を取られてしまう。それ故、A氏は毎日10分から15分ほどの入浴とその後のストレッチで筋肉をほぐそうと努めたのであった。

2つ目に食事にも配慮した。具体的にはトレーニングやTRM後にはプロテインを摂取し、タンパク質などの栄養を多く摂ることで筋肉の回復を早めることに努めた。また体が重くなることを防ぐために、油ものの摂取はなるべく回避した。筋疲労の回復に悪影響を及ぼすとされる飲酒も回避した。

3つ目は、体調を整えるために不要不急の外出を回避した。全国的にコロナウイルスの感染者数が増加していた。もしJRS直前にコロナウイルスに感染すれば周囲に迷惑がかかることはもちろん、何よりもせっかく掴んだ「チャンスを絶対に逃したくない」という気持ちが強かった。

次に頭脳面、タクティカル面で2つの準備を行った。1つ目にTRMの映像分析による振り返りである。A氏の課題はユース年代の試合での判定基準を大学生年代にも適応させてしまい、試合に適応し切れていないことであった。それを克服するために青山氏に分析を依頼し指導を受けた。

2つ目に競技規則の勉強を行った。事前に青山氏から大会初日に競技規則テストを行うとアナウンスがあった。A氏は競技規則テストが苦手なのでその点数が割当に反映されることが不安であった。しかし所属地域の代表として恥ずかしい点数は取れないと時間を掛けて対策を行った。

最後にメンタル面で2つの準備を行った。1つ目は、ゲン担ぎのために信仰している不動尊に参拝することである。自宅からは遠いので頻繁に行くことは無い。人生の岐路に立たされたときのみに訪れている。A氏によれば、審判人生では「間違いなくターニングポイントのひとつになる」だろうし、JRSが近づくにつれ「どんどん緊張感が増した」ため訪れたという。

2つ目に、同地域のJRS参加メンバー3名とネクタイを揃えたことである。きっかけとなったのは、せっかく同地域3名で参加するのだから「気持ちをそろえてはどうか?」という青山氏の助言であった。早速、その助言について他の2名に伝えたと賛同が得られたためお揃いのネクタイを購入した。購入したのは赤色のネクタイであった。赤色を選んだのは誰も持っていない「気合いが入る色」だからであった。JRS開幕当日、A氏は、会場へと向かう新幹線の窓ガラスに映る自らのネクタイを眺めて気が引き締まった。「いよいよJRSが始まるんだ」と。

## 2) B氏の準備

B氏はまずフィジカル面での準備を3つ行った。1つ目は数多くのTRMの審判を担当し、試合感覚の維持に努めたことである。B氏は2～3月の間に3つの大学のTRM、計10試合を担当した。B氏は自身が所属している大学のみならず、A氏と同様に自身が所属している地域大学サッカー連盟の仲間を通じて他大学のTRMを紹介してもらった。2つ目はトレーニングである。繰り返し述べるようにJRSの開催時期はシーズン外なのでB氏は、シーズン中よりも強度の高いトレーニングを行った。特にインターバル走を行った。B氏は同地域の仲間と共にトレーニングを行った。3つ目は新型コロナウイルス感染症対策である。B氏は大人数での会食を控え、消毒、うがい、検温などを徹底した。B氏はもしコロナウイルスに感染すればコンディション不良にとどまらず、JRSそのものの不参加が決定的となると考え、「できる限りの対策を取った」。

次にB氏はタクティカル面での準備として競技規則テスト対策を行った。B氏は、筆記による競技規則テストを受けるのが3年ぶりであったため「とても不安に感じていた」ようである。それ故、B氏は競技規則を時間を掛けて勉強した。

最後にB氏はメンタル面での準備として散髪を行った。B氏は「散髪した直後の担当試合ではゲームコントロールが上手くいったという感覚を持つ経験が多くある」のであった。



JRS での開講式の様子

## II JRSの開催

### 1. インストラクターの実際

#### 1) レフェリーマインドの醸成

##### (1) チームビルディング

初日の開講式では審判員のほとんどが緊張していたように見えた。他地域の審判員とコミュニケーションをとろうという姿勢が見られず、面識のある同地域の審判員で固まっていた。

筆者はまず、なるべく同地域の審判員がばらばらになるよう2つのグループに分類し「積み木式自己紹介」を実施した。次いで、積み木式自己紹介を行うにあたりグループ内での自己紹介を5分間行った。そして、一人一人がグループのメンバー全員を紹介することができるか2つのグループ間で競った。積み木式自己紹介とは、自分より以前の審判員の名前をすべて述べた後に自分の名前を述べるという単純なゲームである。しかしゲームが進行するにつれ、個々のパーソナリティーが伝わっていき、自然と笑いが起こる雰囲気となった。筆者の狙い通りであった。片方のチームが数度にわたって失敗していた。そのチームでは、名前を覚えてもらえるよう自ら働き掛ける者もいれば名前をたずねられるばかりの者もいて、様々なコミュニケーションが図られていた。筆者は、試合における審判員と競技者のコミュニケーションに引き付けつつ審判員が競技者に何か問われたらどう応答するかや、選手にどのように伝達するかをイメージして欲しいとアドバイスした。筆者は、審判員が円滑なコミュニケーションを図るためにどのように応答し伝達すれば良いのかを自問自答していたと思う。

次にグループでの課題解決ゲームを行った。「人生」で「審判」をどのように位置づけるのかについてディスカッションし、それぞれ発表した。積み木式自己紹介を経ているので活発な議論が展開された。課題解決ゲームでは何れも4年生の審判員がリーダーシップを発揮した。4年生の審判員は他のメンバーの意見をなるべく多く、具体的に引き出すことに努めていた。こうした審判員の姿勢は試合で重要である。審判員は競技者と共に試合をつくっていく存在である。審判員はその見解を競技者に押し付け

Oct. 2022

JUFA Referee Seminar の実際

るのではなく、競技者の見解を受け容れつつ最終的な見解を伝達することがゲームコントロールに欠かせない姿勢であると考ええる。

2つのグループの発表では「審判と人生は相互作用であり、審判で得たことを人生に生かす、人生で得たことを審判活動で生かす」、「審判活動は仕事（就職活動）、学生生活、そして家庭とのバランスが大切」とまとめられた。審判と人生のバランスを取るためにはどうすれば良いのかという筆者の質問に対し審判員は、「愛と勇気」と回答した。そこには、仕事や家庭を大切にしつつ審判員という役割にたずさわり続けるためには、応援してくれる人々や自らが取り組む活動に対する愛情と、大好きなサッカー競技に審判員としてたずさわりたいという現在の夢を忘れずに試合内外でどんなに苦しい状況であっても勇気を持って突き進みたい、というJRS参加審判員の審判活動に対する姿勢があった。

## （2）地域の活動紹介プレゼンテーション

地域の活動紹介プレゼンテーションでは各地域サッカー協会と大学サッカー連盟について説明がなされた。審判員は所属協会での審判活動を基本としていることは共通であった。しかし大学サッカー連盟での審判活動の状況は審判育成組織が存在しているか否かで大きな差があった。大学サッカー連盟内に審判育成コースが存在していない地域は、所属大学の帯同審判員としての活動が主たるものとなり、主審を担当する機会が著しく少ない。他方、大学サッカー連盟内に審判育成組織が存在している地域はインディペンデンスリーグなどの準公式戦で主審を担当する機会が多い。また、プレゼンテーション中の態度や姿勢について聞き手の審判員は「早口であった」や「下を向いて発表している」、「落ち着きが無い」などと指摘した。

## （3）国際審判員との交流会

現役国際審判員の杉野氏からまず審判活動と仕事の両立について話があった。杉野氏は主に休日に審判活動を行っている。杉野氏によれば仕事と審判活動でメリハリをつけることが大切である。「トレーニングをする時間がない」のは言い訳にしかならないので、職場の理解を得ながら杉野氏は平日の早朝や業務時間外にトレーニングを行っている。

次にレフェリングについて審判員は、「試合中にうまくいかないことがあるとネガティブな思考に陥ることが多い」と杉野氏に質問した。杉野氏は自分の性格をネガティブかつ心配性であると分析、試合後はいつも落ち込んでいると打ち明けた。しかし杉野氏は落ち込んでばかりではない。杉野氏は、出来なかったことは改善策を検討しつつ自分の「引出し」としている。その意味するところは、全く同様の事象が起り得ないにしても類似した事象が起こった場合にその「引出し」を開けて対応できるよう準備しているということであった。

## 2）レフェリングテクニカル分析

青山氏は試合映像の分析と審判員による自己分析の結果を受けて今後解決すべき大学生カテゴリーの審判員に共通する課題を以下のように提示する。

### （1）ポジショニング

ポジショニングについて青山氏は「対角線式審判法に基づいたポジショニング」と「争点に対して近くかつ適切な角度を保ったポジショニング」が課題であると述べた。特に、大学生カテゴリーの審判員に対する指導のポイントとして「大学生カテゴリーの審判員は当然経験が浅いので事象に対し上記2つの条件を十分満たす適切なポジショニングを取ることができない場合もあり得る。それ故、大学生カテゴ

リーの審判員は、事象の近くでそれに対する情報を多く入手し、かつ説得力のある判定を表現しようと努めるべきである」と説く。

しかし青山氏によれば、JRS参加審判員のように経験が浅い審判員は「たくさん走る」ことはできるものの「その精度」を高めていく必要があるという。

### (2) マンマネジメント

マネジメントとは審判員が試合を円滑に進行するために求められる技術のひとつである。特に、競技者やチーム役員に対するマンマネジメントは試合をコントロールする上で重要である。しかし試合中、JRS参加審判員の何人かが競技者に対し注意を与える機会を逸していたようである。青山氏は、大学生カテゴリーの審判員は「マンマネジメントを行うタイミングとその方法」が課題とされるべきと指摘している。

### (3) 判定について

青山氏は若手審判員における判定（ファウルか否か）における課題としてヘディングの競り合いをあげ、特に「ヘディングの競り合いにおけるつまづかせるファウル（以下、潜り込みと省略する）」と「手、腕の不正な使用」の二点を強調する。

「潜り込み」のファウルを見誤る例として、後方から無理な態勢・タイミングでヘディングの競り合いに挑み、結果として相手選手の後方に乗りかかる形で転倒するものである。本来であれば無理な態勢・タイミングでヘディングの競り合いに挑んだ選手のファウルとすべき事象を逆のファウルに判定する例が散見されたという。

また、「手、腕の不正な使用」については、ヘディングの競り合いの際に手や腕で相手選手の頭部付近を打つファウルを見落とす例が散見されたという。近くでかつ良い角度を保っているにも関わらずファウルを見落とす例もあり、審判員たちとの振り返りを踏まえるに、一般的に背後から体を用いたチャージや手などのプッシングが多く散見されるシチュエーションであったので、そのようなファウルに主眼をおいて監視していたようである。そのような結果、視線のフォーカスを絞ってしまい、手や腕の動き



決勝を担当した審判員



Oct. 2022

JUFA Referee Seminar の実際

を見落として正しく事象を見極めることができていないと指摘している。

## 2. 審判員の実際

### 1) A氏：選手の競技力の高さを実感

A氏は今大会に最高のコンディションで参加するために、栄養面やリカバリーにも気を使いながら準備をしてきた。またTRMと映像分析を繰り返し、フィジカル面だけでなくタクティカル面でも事前に課題を克服しようとしていた。研修会については、全国の同年代の学生審判員が集合して意見交換できる非常に貴重な場と捉えていた。この大会で見えてきた課題が、今後上位カテゴリーに上がるうえで必要となる課題になると予想していた。具体的に研修会で感じたことや考えたことは以下の通りである。

#### (1) レフェリング技術

A氏は、試合に万全のコンディションで入ることができたが、ゲーム展開の速さやフィジカルの強さといった点で予想以上にレベルが高く判定がぶれてしまったという。これまでファウルと考えていた接触でも選手は倒れずプレーを続けるため、自身の判定基準がわからなくなってしまったことが原因であった。またゲーム展開についていこうとスプリントを多用したため、後半になって運動量が極端に落ちてしまった。この試合の評価は次の試合の割当にひびくと考えていたため、普段よりもプレッシャーを感じていた。結果的に自己評価は悪く試合後は落ち込んだが、翌日から副審や4thの割当が続くので気持ちを切り替えて試合に臨んだ。

研修ではアドバンテージの考慮事項に優先順位をつけることを試みた。アドバンテージに関するA氏の課題は、ゲームの雰囲気流されてアドバンテージが必要でない場面でも適用してしまうことがあげられるが、研修を通して選手の特徴や攻撃のスピードも考慮するという点を理解することができた。

マンマネジメントについては、選手に伝えたいことを簡潔に伝えられないという課題があった。自分の焦りや判定に対する不安な思いから話すことがまともな会話が長くなってしまっていた。今回のセッションでは結論、理由の順番で話すことで、より簡潔に自分の考えを相手に伝えることを学んだ。これを習慣化するために研修や試合以外でも結論、理由の順番で話すことを心がけた。

#### (2) 地域紹介プレゼンテーション

地域紹介プレゼンテーションを通して、まだ学連審判部がない地域から部員が40人いるような地域まで様々であることを知った。東海地域は9地域の中でも恵まれている環境であると思ったため、具体的に特徴や取り組みを紹介した。東海学連では学生リーグの運営にも協力している。そうすることでリーグ運営の大変さや苦勞を知り、結果的にレフェリーの役割の重要さを感じることができる。また専任インストラクターの青山氏による定期的なセミナーと試合のビデオ分析が行われていることも特徴の一つである。関東地域が実施している学生主体のビデオ分析会など、取り入れたい内容がいくつもあり、収穫が多い研修であったと述べた。

#### (3) 国際審判員、JFAインストラクターとの交流

A氏は世界で活躍するトップレフェリーの日々の活動内容を聞き、自分も将来トップレフェリーとして活躍したいと改めて思ったという。これまでの国内外での体験や現在の悩みを聞き、それが自分の悩みとも共通する部分があり、課題解決のきっかけをつかむことができた。「仕事の忙しさをパフォーマンスが悪い言い訳にしない」という杉野の言葉は今のA氏にもつながることであり、審判活動に対するモチベーションが上がったという。

## 2) B氏：ライバルの存在と将来への覚悟

B氏は大会の成功のために正しい判定をすべく、90分間全力で走りぬくこと、判定に常に自信を持つことを目標に掲げて今大会に臨んだ。この大会に照準を合わせてフィジカル面、メンタル面で準備を行ってきた。研修の具体的な内容は以下のとおりである。

### (1) レフェリング技術

B氏は本大会前に関東地域でレベルの高い試合を担当していたため、今大会の担当した試合の中で極端なレベルの高さは感じていなかった。ゲームのスピードに慣れているので展開が読みやすく、また動き出しを早くして争点に向かうため、心に余裕をもって判定することができたと振り返る。しかし判定について、特に懲戒罰に課題を感じていた。ゲームを通して判定基準は概ね一貫していたが、懲戒罰を与えた選手の判定に疑問が残った。警告する前の同じ選手に対するファウルの判定の際、最後まで接触点を見ないで笛を吹いてしまい、自分でも疑問が残ったという。またその不安を試合中に悩んでしまい、結果的に不安な気持ちのままゲームを進めてしまった。

B氏はアドバンテージの課題としてゲーム全体の流れや状況を意識できていないことをあげた。デンチャレの選手の特徴であるすぐには倒れず自分の最大限のパフォーマンスを見せようという姿勢を、ビデオ分析を通して学んだ。そして選手の良さを引き出すためにどうするかを考えるようになった。いっぽうで選手の安全を守ることも重要であることを理解した。

### (2) 地域紹介プレゼンテーション

ERCは多くのトップレフェリーを輩出しており、長年にわたって学生審判員の育成を行ってきた。現在は1級インストラクターに限らず多くのOB・OGに支えられて運営されている。年10回開催される定期セミナーの内容は学生が主体になって構成している。またセミナー以外の日には自主的にビデオ分析会を開き、何時間も議論をしている。試合環境は関東大学サッカーリーグ2部の毎節2試合が割り当てられ、トップレベルの試合を経験することができる。さらにIリーグも担当することができるため、試合を担当する環境に恵まれている。ERCは全国の学連審判育成組織のモデルとなっているが、今後も他地域の取り組みなどを積極的に取り入れたいと考えている。卒業後もOB・OGとの交流が盛んであることもERCの特徴である。

### (3) 国際審判員とJFAインストラクターとの交流

B氏は上級審判員を目指している。今回現役のトップレフェリーのキャリア設計や成長過程での変化についての話に大きな刺激を受けた。特に杉野氏の仕事に取り組みながらトレーニングを行い、また週末に全国で割当を受けている話を聞き、サッカーに取り組む姿勢を学ぶことができた。自分の将来を重ね合わせながら、今の自分がやるべきことを考えさせられるきっかけとなった。

## おわりに

第36回デンチャレへの審判員派遣依頼を受諾するにあたり、筆者を突き動かしたのは従事しているJリーグでの経験と、デンチャレを開催するために議論を重ねていた全日本大学サッカー連盟学生スタッフの想いであった。JRS参加審判員にはコロナ禍で奮闘する学生スタッフの姿を目で見て、彼らの想いを背負って試合を担当して欲しいと筆者は考えたのである。

JRSの開催に向けてJ1担当審判員の筆者と東海地域担当インストラクターの青山氏は、日本のトップ

Oct. 2022

JUFA Referee Seminar の実際

ブないし地域リーグ担当審判員に求められていることを考慮しつつ準備を進めた。筆者らインストラクターは、チームビルディング、レフェリング分析、プレゼンテーション、国際審判員との交流会をセッションとして設定した。

2名のJRS参加審判員はそれぞれフィジカル、タクティカル、メンタルの面で準備を行った。2名の共通点としてはJRSに向けて多くの試合経験を積んだことがあげられる。2名が所属する地域大学サッカー連盟には審判育成組織が存在しており、同組織に所属する仲間に協力してもらいながら試合を担当する機会を確保していた。2名はコンディショニングに配慮していたし、新型コロナウイルス感染症対策として日々の体調管理を徹底していた。さらに2名はネクタイや散髪などのゲン担ぎを行っていた。このような準備が行われた背景には、地域の代表として期待がかけられている審判員の姿やJRSを経て大きくステップアップを図りたいという審判員の姿があった。

チームビルディングのプログラムを取り入れたことで、参加審判員はチームとして結束力を高めて試合に臨むことができた。地域の活動紹介プレゼンテーションでは、所属する地域と他の地域を比較することで、環境面での改善点を見つけ出すことができた。国際審判員との交流会では、審判員の抱えるキャリアの問題について、杉野氏の実際に仕事と両立している生活を聞くことで、審判員は卒業後の審判活動のイメージできるようになった。JRSを通して審判員は、試合、レフェリング分析、研修のサイクルを回すことで日々成長した。結果として今持っている最大限のパフォーマンスを披露し、(同世代で同じ志を持つ審判員と一丸となって試合に臨んだことで)、大会の成功に寄与することができた。しかし、レフェリング技術の面では特にポジショニング、マンマネジメント、ポジショニングの面で多くの課題が指摘された。各審判員はその課題を地元地域に持ち帰り、課題を克服して成長した姿で仲間たちと再会することを誓った。

以上のようにみてくれば大学生カテゴリーの審判員は全国大会レベルの試合を経験することが喫緊の課題であるといえる。JFAは20代の審判員育成に焦点化し、早い段階で国際舞台を経験するレフェリーを輩出することを目指している。しかし現状その機会を提供するシステムが機能しているとは言い難い。地域大学サッカー連盟とJFAの審判育成システムの提携こそが必要であると考え<sup>9)</sup>。

### 【謝 辞】

本報告を執筆するにあたり、愛知学院大学の青山健太氏、中央大学の増山舜氏、JRS参加審判員の皆様には史料をご提供いただくとともに、数多くのご教示を賜りました。改めて感謝申し上げます。

### 注

- 1) JRS参加者は、北海道1名、関東6名、北信越1名、東海3名、関西2名、中国1名、四国1名、九州1名であった。選考内容としては、①保有資格(2級以上)②学年③担当試合実績④抱負及び課題を設定した。
- 2) 「高校総体審判員が感染：サッカーの3人、競技は継続」『中日新聞』2021年8月18日付。
- 3) 日本サッカー協会編『サッカー競技規則2021/22』日本サッカー協会、p.215、2021年。
- 4) <https://www.soccerdigestweb.com/news/detail/id=103459> (2022年7月3日最終閲覧)
- 5) <https://news.yahoo.co.jp/articles/8675bc38b5288e3b1ca33c414f3c89762a427e1a> (2022年7月3日最終閲覧)
- 6) <https://technicalnews.jfa.jp/30333/> (2022年7月3日最終閲覧)
- 7) <https://news.yahoo.co.jp/articles/29d58ca2b5dd405fdacbd642171f8d706ca12ad6> (2020年7月3日最終閲覧)
- 8) 前掲、『サッカー競技規則2021/22』、p.215。
- 9) 実のところ筆者は既に地域大学サッカー連盟とJFAの審判育成システムの提携に向けて始動している。ただしこの内容の報告については別稿に委ねることとしたい。

(2022年7月15日掲載決定)